若越郷土研究　六十一巻二号

グリフィスの二人の助手について　―大岩貫一郎と中野外志男―

沖　久也

はじめに

W・E・グリフィスは、福井藩の藩校明新館で主として物理と化学を教えていた。この時、藩は大岩貫一郎と中野外志男の二人を正式なグリフィスの助手すなわち職員として採用している。

筆者は先に、本誌に「グリフィスの残したメモ“Students”（学生名簿）について」という題で報告した[1]。これはグリフィスの弟子（生徒）としてどのような人物がいたかを知る基礎的な史料として重要であると考え、このメモにある五〇人ほどの生徒の同定を試み、そのうちの二〇人ほどについて同定ができたのでそのことを報告した。

しかしながら、ここに取り上げる大岩と中野は助手であるため、上記のメモには名前はない。しかし、この二人はグリフィスの福井滞在中最もグリフィスの身近にいた人物と考えてよい。すなわち助手として学校でも接触があり、また、グリフィスの新居にもこの二人は同居している。

そこで本稿では、この二人について、一章ではこの二人が助手に選ばれた理由とその時期について見る。二章では福井でのグリフィスと二人の交流関係を、グリフィス福井日記や姉のマーガレット宛ての手紙などを通して見る。三章では大岩貫一郎の生涯を記し、四章では中野外志男の生涯を見ることにする。

なお、今回も山下英一氏の『グリフィスと福井（増補改訂版）』[2]の中の『グリフィス日記』（一八七一年三月一日～一八七二年一月二十二日）と福井滞在中の姉マーガレット宛ての手紙をまとめた『グリフィス福井書簡』[3]の英文翻刻とその日本語訳を使わせて頂いた。

一　大岩と中野が助手に選ばれた理由と時期について

大岩と中野については『福井県立福井中学校創立五十周年記念録』[4]人物編の大岩貫一郎の項に「藩侯は大岩と中野（当時秀才と聞く）の二人のため、外国人を招聘したとの世評があった」と記されている。すなわち、藩としてはこの二人に特別な期待があって外国人に直接指導してもらいたいという意向があったと思われる。

これを裏付けることが「子弟輩」（松平文庫九二二号）に見られる。大岩については明治三年（一八七〇）十二月の所に「謹慎中であるが訳あって登城の上修行を申し付ける」とある。これはグリフィスの来福が決まったので、藩は大岩に準備のために既に来福していたルセーについて英語を学ばせるためにした措置と思われる。

一方、中野の「子弟輩」には、明治三年十月の所に「諸学科試業乃上中級へ登進ニ付年々米六俵被下候」とあり、藩が中野を優秀な人材であるとみなしていたことが間違いなく、やはりグリフィスの来福が決まり、ルセーに英語を学ばせていたと思われる。

すなわちこの二人については、藩は最初から特別に教育して欲しいためグリフィスの身近に置いて教育するように願い、その結果、グリフィスが助手として選んだというより、藩の意向に沿って助手として教育をし、最終的に正式な助手になったと思われる。

次に、大岩と中野が助手になった時期であるが、正式に二人が助手になったのは、グリフィスの日記の一八七一年十月二十六日（明治四年九月十三日）に「今日、中野と大岩が化学科の助手に任命される」とあり、また、両人の「子弟輩」にはいずれも明治四年九月十三日の項に「化学科庶務方兼教授手伝いを仰せつけらる」とあり、この日に正式に助手に任命されたことは確かである。

しかしながら、グリフィスの姉マーガレット宛の手紙（一八七一年五月十七日付）の中で「中野、私の助手、は洋行が可能ならそれに推薦して欲しいと言っていたが、二～三週間前にもし私の助手になれるならあきらめると言ったので、木滑を推薦した」と記している。ここで注目すべきは、この手紙の原文では中野を「my assistant」と記している点である。すなわち、五月にはグリフィスは中野を助手と考えていたことが分かる。大岩については史料がないが、中野と同様に考えてよいと思っている。すなわち、大岩と中野については藩の意向もあり、グリフィスは最初から二人を助手扱いしていたと思われる。

二　グリフィスの福井日記と福井書簡に見られる二人の助手

ここではグリフィスの福井日記や福井書簡などからグリフィスと二人の交流を見る。

グリフィスの日記に二人が同時に出てくる日が一八回と一番多く、大岩だけの日が一五回そして中野が八回であり、合計では四一回である。これらの日記の内容を表1に示す。なお、表の人物の項に単独の場合は、大岩や中野と記し、二人が同時の場合は両者とした。

表１　中野と大岩の２人の日付とその記述内容

	日付	内　容	人物
	1871 年		
1	6 月　6 日	中野と散歩に出掛けた	中野
2	6 月　7 日	夜、中野、大岩、小栗が英国史を読む	両者
3	7 月　1 日	昼寝をした、岩淵、大岩、中野と泳ぎに行った	両者
4	7 月 12 日	夜、中野、大岩、とロスコウの化学書を読んだ	両者
5	7 月 23 日	中野ともう一度散歩した	中野
6	9 月　7 日	中野が私から 20 両借りた	中野
7	9 月 11 日	大岩と中野が今日から教え始めた	両者
8	9 月 13 日	図画をはじめた、佐々木氏と中野が手伝った	中野
9	9 月 22 日	大岩が岩淵の代わりに通訳をした	大岩
10	9 月 27 日	大岩、中野、本多と化学の本を読んだ	両者
11	10 月 11 日	岩淵、中野と一緒に馬に乗った、中野が落馬した	中野
12	10 月 13 日	会食を中止する、中野と大岩は日本食にする	両者
13	10 月 14 日	岩淵、中野、大岩と城内や石垣、侍部屋を見て歩いた	両者
14	10 月 15 日	朝、中野、大岩と『新約聖書』のマタイ伝を読んだ	両者
15	10 月 15 日	大岩の家で夕食をとった	大岩
16	10 月 22 日	大岩、吐酔、中野とマタイ伝五章を読んだ	両者
17	10 月 23 日	県庁で中野と大岩の給料の話が決まった	両者
18	10 月 25 日	午後、大岩、中野、吐酔、岩淵と佐々木の家に行く	両者
19	10 月 26 日	今日、中野と大岩が化学科の助手に任命された	両者
20	10 月 26 日	大岩とバーカーの化学書を日本語に訳す	大岩
21	10 月 29 日	カール、中野、大岩、吐酔、岩淵とマタイ伝六章を読んだ	両者
22	11 月　7 日	午後、大岩と府中の方へ散歩、文明について大岩と話した	大岩
23	12 月　8 日	大岩と日本語の会話の練習をした	大岩
24	12 月　8 日	岩淵、中野、本山が病気になった	中野
25	12 月 10 日	吐酔、大岩、肥後と『新約聖書』を読んだ	大岩
26	12 月 15 日	11 時まで大岩と日本語の会話を練習した	大岩
27	12 月 17 日	江守、桑原、大岩が訪ねて来た	大岩
28	12 月 19 日	Ｂ組・Ｃ組は中野・大岩が授業をした	両者
29	12 月 24 日	朝、中野、吐酔、大岩とイエスのたとえ話を読んだ	両者
30	12 月 29 日	夕食、大岩とゆっくり話をした。福井か江戸か。通訳は何故侮られるのか	大岩
31	12 月 31 日	大岩は１年前、キリスト教徒が流罪になり福井を通った話をした	大岩
	1872 年		
32	1 月　1 日	夜、中野に教えてもらい東海道の旅の本を読んだ	中野
33	1 月　4 日	大岩と日本語の本を読んだ	大岩
34	1 月　7 日	10 時まで大岩と話をした	大岩
35	1 月　7 日	中野、大岩、吐酔と大きな寺へ行った	両者
36	1 月 14 日	朝食後、大岩と中野とマタイ伝を読んだ	両者
37	1 月 16 日	大岩が私の村田への手紙を持って帰って来た	大岩
38	1 月 17 日	夜、大岩や少年達と地図、案内書を調べた	大岩
39	1 月 18 日	大岩が「よろしい」と言う言葉を県庁からもらって帰ってきた	大岩
40	1 月 20 日	中野と少年達二人と散歩をした	中野
41	1 月 21 日	中野、大岩から茶と菓子の接待を受けた	両者

日記に二人の名前が出てくるのは六月初めである。先の一章で記したように、グリフィスが二人を最初から助手として扱っていたとすれば、日記に名前が記されるのが遅い気がする。しかし、おそらく二人はまだ実験の助手をするほど化学の知識も無く、更にグリフィスも福井に来たばかりで藩の要人たちとの交流があり、また化学所や新居の設計そして授業についても試行錯誤の状態であり、福井の町や周辺の状況を知る必要があるなど、学校以外のことで日記に記すことが多く、二人に関する記述が無いのではと思われる。

すなわち六、七月に入りグリフィスも少し落ち着き、二人に助手としての教育や他の生徒と違った交流もあり、日記中に名前が現れたと思うが、なぜ、この時期に中野との散歩が多いのかはよく分からない。

八月は二人の名前は一度も記されていない。八月十四日から九月三日まで夏休みで、その期間にグリフィスは白山登山や、その前にも三国に一泊二日で出掛けている。注目すべきは、これ以外にも日帰りの小旅行をたびたびしているが、大岩と中野は一度も同行した形跡はない。普通に考えれば、この二人の助手の教育をするには絶好の機会であると思われるが、なぜ、同行させなかったかその理由はよく分からない。

九月十一日に「大岩と中野が今日から教え始めた」とあり、このころから実際に助手として活動している。そして、九月二十五日にグリフィスの新居に二人は同居している。

十月になると、十五日に「朝、中野、大岩と『新約聖書』のマタイ伝を読んだ」とあり、その後も二十二日、二十九日にも聖書を読んでいる。すなわち、グリフィスは自宅で同居人達と聖書を日曜日に読むようになっている。しかしながら、その出席者は同居人に限られている。なお、家老の息子である本多が出席していないのは注目すべきことである。

十一月は七日の大岩との散歩しか記されていないが、日曜日には聖書を読んでいる。なぜか、この月は「家族全員で「山上の垂訓」読んだ」（五日）や「いつものように、『新約聖書』を読んだ」（二十六日）というように個人名が記されていないためである。

十二月で注目すべきは十九日に「B組・C組は中野・大岩が授業をした」とある。上級者のA組はグリフィスが教え、初心者については二人が教えていたことがわかる。また、聖書を読むことはこの月も行われており、特に二十四日にはおそらく福井最初のクリスマスイブで足袋にプレゼントを入れたことや、二十五日には多くの生徒や教師・役人が来てクリスマスを祝ったことが日記には記されている。

一月二十二日はグリフィスが福井から東京へ移った日で、それ以前にグリフィスと村田氏寿との間で東京に移る、いや福井に残って欲しいというやり取りがあったことはよく知られている。十六日と十八日の記述は大岩が庶務方としてグリフィスの手紙を村田の所に持っていったこと、後者は村田がグリフィスの東京行きを承諾したことを指し、大岩が両者の間で連絡役をしていた。また、グリフィスが東京へ行く準備の手伝いを二人がしていたことが分かる。

沖　グリフィスの二人の助手について

別の角度、すなわち大岩と中野の二人の名が一緒に日記に記されている場合の事項と別々に記されている事項を見ることにする。

（一）両者の名前が出てくる日

両名が記されている事項で目につくのは、キリスト教に関するもので、一八回の内グリフィスの新居に同居をはじめた九月二十五日以降六回（十月十五日、二十二日、二十九日、十二月十日、二十四日、一月十四日）、但し十二月三十一日は「家族でマタイ伝の一四章と一五章を読んだ」とあり、その際に大岩が「キリスト教徒が流罪になり福井を通った」という話をしたので、表の人物の項では大岩と記したが、この時は中野も同席したと考えられる。また、十一月は日記には個人名は記さずに「家族と一緒」にというような表記で聖書を読むなどと各日曜日（五日、十二日、十九日、二十六日）にはキリスト教関係の本を読み、毎回この二人も出席していたと思われる。このことから、グリフィスは同居人のみを対象にして一種の伝道活動をしていたが、当時はまだキリスト教は解禁されていなかったので、一般人への布教活動は藩（県）も許さず、これ以上の布教活動は出来なかったと推測される。

次に助手に関するもので、これには県からの事務的なものや化学書を読むなども含むが、化学書を読む（七月十二日、九月二十七日）、授業をしたこと（九月十一日、十二月十九日）、事務的なこと（十月二十三日、二十六日）が日記に見られる。なお、化学書を七月から二人と読むとあることから、遅くともこの時期から授業をするため二人に知識を教え始めた。そして九月十一日に「二人が今日から教え始めた」になったと思われる、なお十二月十九日はクラス替えをしたときの記述であり、二人は九月十一日以降ずっと初心者の化学を教えていたことが伺える。事務的なことは、二人の給料が決まった日（二十三日）と助手の辞令が出た日（二十六日）である。

その他は運動や散歩などで、運動は特に水泳が家の前に足羽川があったこともあり、グリフィスはよく行っているが、その一端が七月一日「泳ぎに行く」にみられる。また市内の探索と散歩と思われるものがある（十月十四日、一月七日）。それ以外には六月七日「英国史を読む」、十月十三日「会食を中止、中野と大岩は日本食」とある。ここに本多の名前がないが、その理由は分からない。あとは十月二十五日に「佐々木の家に行った」と一月二十一日の「茶と菓子の接待を受けた」で、前者は佐々木権六の所にグリフィスと共に行ったもので、後者はグリフィスが福井を去る前日に二人が別れの接待をしたものである。

一方『福井書簡』に二人の名前が同時に記載されているのは四回であり、やはり六月が最初で六月五日の家族宛てのもので「助手の二人、中野と大岩という特に頭がよくて快活な学生を（新居）住み込ませる、そこで二人は大喜び」とあり、この時点でグリフィスは新居が完成した時には一緒に住むことを決めていたことが分かる。そして、十月一日と二十八日付の姉のマギーへの書簡で前者には「中野、大岩、本多はこの家に住み今のところは何も問題はない」と記されている。後者には「この家に今、事実上の家族、本多、大岩、中野が居て、このぼくの助手三人が一室に、もう一室はカール、吐酔、

本山…」と記している。実際に新居に引っ越した日は九月二十五日で約一か月後の様子を知らせている。なお、同じ後者の書簡の中で「中野と大岩は「役人」でつまり俸給取りの教師で、年七五ドルはあまり多くはないが日本人教師の俸給にしては比較的悪くはない」と記している。これは日記の十月二十三日に「県庁で給与の話が決まった」という内容を記したものである。最後は家族あて（十二月二十四日）で、クリスマスの様子を知らせ、その中で「みんなのカップにコーヒーを注ぐのを見て、大岩、中野、吐酔はこの行事の主人役を務める僕を手伝ってくれた」とあり、グリフィスと二人の間は同居後もうまくいっている様子が伺える。

（二）大岩の名前だけが出てくる日

日記には大岩だけの場合は一五回出て来る。その内でキリスト教関係のものは二回だけである。最初の十二月十日は中野が八日に病気になったためで、後の十二月三十一日は「家族で一緒にマタイ伝読む」の後に「大岩が流罪になったキリスト教徒の話をした」とあり、家族の中に中野もいたと考えられる。すなわち、キリスト教関係の集会には本来ならいつも一緒に出ていたと思われる。

学校関係で、九月二十二日に「岩淵の代わりに通訳をした」とあり、グリフィスの講義の通訳をしている。また、十二月十七日に「江守、桑原、大岩が訪ねて来た」とあるが、この顔ぶれから考えて学校関係の話と思われるがその内容は分からない。大岩の辞令には「化学所庶務方兼教授手伝い」とあることから事務的な仕事もしていておかしくない、それに関連するものとして、先に記したよう一月十六日と十八日の日記から、大岩がグリフィスと村田の連絡役をしていた事が分かる。

次に、グリフィスの日本語の勉強に関するもので、十二月八日、十二月十五日の「日本語の会話を練習する」及び一月四日「日本語の本を読んだ」とある。また、グリフィスとの対話であるがこれには十一月七日「文明について話し合う」、十二月二十九日「福井か江戸か、通訳はなぜ侮られるか」、そして一月七日には内容は不明であるが「一〇時まで大岩と話をした」とある。このような対話の相手には、以前には佐々木権六や三岡八郎（後の由利公正）、橋本綱維などがいたが、これらの人達は十一月には東京に行っており、福井での話し合い手に大岩がなったと思われる。

それ以外には、十月十五日「大岩の家で夕食」とあり、大岩の家での内輪だけの集まりに呼ばれている。そして、一月十七日の「大岩や少年達と地図や案内を調べた」であるが、これはグリフィスが東京に行くときの地図や案内を調べたものである。

なお、『福井書簡』には大岩だけに関する記述は一度もない。

（三）中野の名前だけが出てくる日

中野の名前が単独で日記に記されるのは八回である。この場合に一番多い事項は、散歩で四回ある。すなわち六月六日、七月二十三日はグリフィスと二人で、十月十一日「岩淵、中野と一緒に馬に乗った」、一月二十日「中野と少年達の二人」はグリフィス以外にも同伴者がいる場合であるが、これらは特に目的などは無く、おそらく市内を散策したものと思われる。なお、十月十一日は「馬に乗って」

とあるが、これも出掛け先がなく、市内をまわったものとした。

学校関係では九月十三日「図画を佐々木と中野が手伝う」とあるが、これでグリフィスの図画の授業を二人が手伝っていた事が分かる。なお、ここでいう佐々木は佐々木権六である。十二月八日「岩淵、中野、本山が病気になった」とあり、学校を風邪か何かで休んでいる。残りは九月七日と一月一日で、前者は「私から二〇両」とあるが、借りた理由などは何も分からない。後者は「中野に教えてもらい東海道の旅の本を読んだ」とあり、この時期はすでにグリフィスは東京へ行くことを固めてその準備として読んだものと思われる。

一方、『福井書簡』には上述のようにマギーあて（五月十七日）の中で、木滑を留学生として藩に推薦したことに関連して「中野が助手に任命してもらえるなら洋行を辞退してもよい」と言ったことを記している。この一度だけ中野に名前が単独で出ている。

ここで、グリフィスと二人の助手との接触の違いについて簡単に触れておく。

授業については、二人で初心者を分担して担当するなど同じように分担していた可能性が高いが、大岩は岩淵の代わりに講義の通訳をしており、一方、中野は図画の補助をするなどそれぞれの能力の違いで分担の仕方が違う場合もあったようだ。散歩であるが、中野の場合はグリフィスと四回散歩をしたことが日記にあり、それらはすべて市内探索といったものと思われる。一方、大岩は「文明について話し合う」（十二月七日）のようにゆっくりと話し合うことにあったと思われる。これはグリフィスの話し相手であった藩の用人たちが十一月にはほとんど明治政府の意向で東京に行き、大岩がその穴埋めをしていたと思われる。また、グリフィスの日本語の勉強についても大岩が相手をし、更に学校関係の事務的なことも大岩が主として担っていたと思われる。これらの二人の違いは、おそらく大岩の方が中野に比べて年長であり、すでにグリフィスの来福以前に江戸に出ていて、開成学校で英語修行をしており、中野は明新館を出たばかりなので、大岩の方がいろいろな経験もあり、英語の能力も高かったのでグリフィスと二人の助手との接触の仕方に違いが出来たのでないかと思われる。

三　大岩貫一郎の略歴

本章では、大岩貫一郎（一八五〇～一九一九）の生涯を見るが、それに先立ち貫一郎の略歴を記した二冊の本について触れておく。一つは『福井県立福井中学校創立五十周年記念録』の歴代校長の中にある三代校長の所に大岩貫一郎の簡単な略歴と人物描写が載る。もう一つは貫一郎の父の主一が生まれ、貫一郎の墓もある法満寺のある清水町（現在は福井市）の『清水町史 下巻』[5]の人物誌に彼の略歴が記されている。

これらは貫一郎の略歴に関する基本的な資料であるが、誤記と思われる事項や食い違いも見られるのでその点について記しておく。

共通して誤記であると思われるのは、両書に「幼時、橋本左内と

は竹馬の友であった」という記述がある。これが何に基づいて記されたかについては両書とも記していない。しかし、左内は天保五年（一八三四）生まれで一方、貫一郎は嘉永三年（一八五〇）生まれであり、その年齢差は実に一六歳である。すなわち、この年齢差を考えると左内と貫一郎が竹馬の友という関係はありえないと思われる。

両書の違いが見られるのは、その経歴と逝去の場所で、『五十周年記念録』ではその経歴は「福井中学より、岐阜県、埼玉県、香川県、兵庫県等に奉職…五〇年の長きに及んだ」とあり、逝去の場所は「永年育英に尽くされたが病を得て職を辞し、足羽河畔の別邸にて天命を全うせられた」となっている。一方、『清水町史』では「明治三十年二月同校（福井中学）を去って神奈川県逗子に居を構え、そこで余生を送り、大正八年八月十日この世を去った」とある。後述のようにこの経歴と逝去の場所については『五十周年記念録』の方が概ね正しい事が分かった。しかし、『清水町史』では貫一郎は大岩主一の長男とあるが、石橋重吉編『幕末維新名流戸籍調』[6]の大岩圓（主一の弟）の項には、圓の長男で肩書きは養父主一亡次男とあり、また貫一郎の妻奈加の名前も見られる。また『清水町史』ではグリフィスの日記の貫一郎についても記されている。なお、この点については『五十周年記念録』では触れておらず、貫一郎がグリフィスの助手をしていたことも記されていない。

本稿では、新しく分かった事実に基づき貫一郎の略歴を表2に記し、その生涯を見ることにする。

（一）グリフィスの来福以前の貫一郎

貫一郎は、藩医の大岩主一の次男として嘉永三年（一八五〇）六月に、越前福井浜町（福井市中央三丁目）に生まれる[6]。そして、おそらく父主一の教えや、明道館に学び、その後一五歳（元治二年〈一八六五〉）の時に『子弟輩』にあるように「江戸へ医学修行」ということで佐倉の佐藤尚中のもとに弟子入りをした。そして、五カ月後には「英語修行」ということで開成所へ行き、その後は佐倉に戻るが、直ぐに実母の治療ということで帰福している。そして明治元年（一八六八）には「奥御師、洋学所教授方勤被仰付」がなされているが、その七か月後には出奔している。この理由ははっきりしないが、上述のように父の主一が有名な藩医であり、当然医者になるように教育を受けていたが、貫一郎自身は医者には向いていないという思いがあり、このような行動に出たと推測している。そのために「蟄居」を申し渡されるが、一方ではグリフィスの来福が決まり、彼の才能を高く評価していた藩は、英語も開成所で学んでいた事もあるので、医者でなく、グリフィスについて理化学を習得させようと藩の方で考え、その結果が表2の「蟄居中にもかかわらず修学を命ぜらる」とあり、グリフィスの来福（明治四年一月十四日）後の二月二十三日には「蟄居を免ず」とある。

すなわち、貫一郎はグリフィスの来福以前から医者になりたい気持ちを無くしており、藩としては理化学の必要性を十分に認識していたので、グリフィスに貫一郎の教育を託したものと思われる。そして貫一郎もそれに応えたので藩では明治四年九月十三日に「化学

表２　大岩貫一郎の略歴

西暦		和暦		年齢	事　　項	出典
1850 年		嘉永　3 年	6 月	0	越前国福井浜町にて大岩主一の子として生まれる	文献(4)
1865 年	4 月	元治　2 年	3 月	15	医術修行のため江戸へ出立	子弟輩
	9 月	慶応　元年	7 月		佐倉へ修行	同上
1866 年	4 月	慶応　2 年	2 月	16	江戸開成所へ英語修行	同上
1867 年	4 月	慶応　3 年	3 月	17	また来辰春まで佐倉で修行	同上
	6 月		5 月		親（実母）の治療にあたるため帰国願い	同上
1868 年	11 月	明治　元年	10 月	18	奥御師、洋学所教授方を務めるよう仰せ付けられる	同上
1869 年	4 月	明治　2 年	3 月	19	貫一を貫一郎に改名	同上
	6 月		5 月		出奔	同上
1870 年	7 月	明治　3 年	6 月	20	昨年の脱走につき蟄居	同上
1871 年	3 月		12 月		謹慎中であるが訳あって登城の上修行を申し付けられる	同上
	3 月	明治　4 年	1 月	21	（グリフィス来福する）	
	3 月		2 月		蟄居を免ぜらる	同上
	6 月		4 月		咎が免じられたので再嫡子願い通りとする	同上
	10 月		9 月		化学所庶務方兼教授手伝いを仰せ付けらる	同上
1872 年	1 月		12 月		二等教授	同上
	1 月		12 月		（グリフィスが東京（南校）へ移る）	
	9 月	明治　5 年	8 月	22	理化学教師通弁勤むるに付き、月々 15 円下される	同上
1875 年		明治　8 年	7、8 月頃	25	医学所教諭として大岩貫一郎の名前がある	文献(11)
1878 年		明治 11 年	1 月	28	福井公立医学校の教員名列に大岩貫一とある	同上
1881 年	12 月	明治 14 年	12 月	31	福井県中学校の教諭となる	文献(12)
1883 年	12 月	明治 16 年	12 月	33	校長心得	同上
1884 年	6 月	明治 17 年	6 月	34	校長心得を免ぜられる	同上
	12 月		12 月		岐阜県立高山学校初代校長として任命される	文献(16)
1886 年	7 月	明治 19 年	7 月	36	私立斐太に改称したが校長は変わらず	同上
1893 年	10 月	明治 26 年	10 月	43	校長を退職する	同上
1894 年	4 月	明治 27 年	4 月	44	福井県尋常中学校小浜分校長	文献(17)
1897 年	2 月	明治 30 年	2 月	47	小浜中学分校長（大岩貫一郎）転任	同上
	2 月		2 月		滋賀県立尋常中学校長となる	文献(18)
	8 月		8 月		滋賀県立尋常中学校長を免ぜらる	文献(19)
	8 月		8 月		埼玉県第二尋常中学校教諭（教頭）となる	文献(20)
1900 年	9 月	明治 33 年	9 月	50	埼玉県第二尋常中学校教諭（教頭）を免ぜらる	同上
	9 月		9 月		香川県立高松中学校教諭となる	文献(21)
1904 年	5 月	明治 37 年	5 月	54	香川県立高松中学校教諭を免ぜらる	文献(22)
1905 年	4 月	明治 38 年	4 月	55	兵庫県立小野中学校教諭となる	文献(23)
1909 年	8 月	明治 42 年	8 月	59	兵庫県立小野中学校教諭を免ぜらる	文献(24)
1917 年	10 月	大正　6 年	10 月	67	兵庫県立小野中学校嘱託教授をやめる	文献(23)
1919 年	6 月	大正　8 年	6 月	69	福井にて死去する	文献(4)(5)

所庶務方並教授手伝いを仰せつけらる」ということで正式に助手に任命し、その後、グリフィスが福井を去った直後の明治四年十二月十六日に二等教授に昇格させている。

（二）グリフィスの福井退去以後の貫一郎

ここではグリフィスが明治四年十二月十三日（一八七二年一月二十二日）に福井を去ったその後、貫一郎がどのような生涯を送ったかを見ることにする。なお、彼は生涯の間に幾つかの県で教鞭をとっているので、それに沿ってその生涯を見ることにする。

（1）明新館二等教授から福井中学教諭まで（一八七二～一八八一）

上述のように貫一郎はグリフィスの退去後もそのまま明新館に二等教授として在任し、そして、グリフィスの後任としてマゼットが三月頃に福井に来たのでその通訳などをしていたと思われる。このころ学制頒布により明新館は第二十八番中学になり、また県の体制も大きく変化して、明治四年（一八七一）十二月には福井は足羽県と敦賀県に分割され、明治六年一月には両県の合併の建議が敦賀県参事藤井より政府にだされて承認され、足羽県は消滅して敦賀県となった。このためマゼットの足羽県との契約が切れたのか、明治六年五月一日より二年間敦賀県貫属士族・打它産次郎、大和田荘兵衛に一五〇ドルで雇われ、その後、明治八年八月には東京へ行った。貫一郎はマゼットが足羽県と契約していた間は、『子弟輩』にあるように明治五年八月二日に「理化学教師通弁ニ勤ムニ付、月付き金十五円を供す」とあることから、理化学教師とマゼットの通訳をしていたと考えてよい。

上述のようにマゼットは敦賀の豪商たちに雇われている。このことは山下の『グリフィスと福井』にも記されており、『資料　御雇外国人』[7]のマゼットの項でも確認された。この時、マゼットが本当に敦賀に行ったのか、また行ったのなら、その際貫一郎は同行したのかという問題がある。

そこで、この二年間のマゼットの動向であるが『敦賀市教育史』[8]には「『敦賀郡誌』によれば、明治五年（正しくは六年）米国人E・Hマゼットが福井から来て永賞寺で英語の教授をしたとある。八ヵ月程永賞寺に宿泊していたということだが、誰が、何を習ったかはよく分からない。…当地滞在の文書は見当たらない」とある。すなわち『敦賀郡誌』よればマゼットが実際に敦賀いたのは八か月であるが、それ裏付ける文書は現在敦賀では見つかっていないのである。これに関連すると思われる資料として『文部省年報明治七年　付録』[9]の敦賀県からの報告に「第二八番中学区英語学校ハ師範学校ノ中に在り、英人マゼット氏ヲ聘シテ教師トシ、其の給与百五十円…マゼット氏は八年五月迄ノ契約ナルヲ以テ其満期ヲ待テ当校閉ジ」とある。これによるとマゼットは敦賀に行くことはなく福井の英語学校で教えていたとも解されるが、敦賀に行ったが八か月後には福井に戻り、中学区英語学校で教えたとしても矛盾はしていない。また、山下の『グリフィスと福井』の「三章　福井の英学」のマゼットの項では「マゼットが敦賀に行き、寺に宿泊していること」は記されているが、滞在期間については何も記されていない。おそらく『敦賀郡誌』に基づくものと思われる。

すなわち、マゼットが敦賀に行ったかどうかも上記の資料だけでははっきりしないが、筆者はマゼットが敦賀に一時期滞在したことは確かだと思っている。なぜなら『福井県教育百年史』によると「明治七年師範学校として独立させ、福井中学は明新中学に改組した」[10]とある。上記の『文部省年報』と一緒に考えるとマゼットはこの改組の時に福井に戻り、明新中学（英語学校）で英語を教えていたと考えている。当時、貫一郎は結婚もしており、おそらく敦賀には同行してないと思われるが、マゼットの福井滞在時には通訳や理化学を教えていたと考えられる。

なお、明治五年の八月にはもう一人の御雇外国人のワイコフが来福しているが、彼は通訳として雨森（旧姓松原でその名前はグリフィスの日記にもある）を連れてきており、基本的には貫一郎はワイコフの通訳はしてないと思われる。そして、ワイコフは明治七年九月に文部省の命で新潟外国語学校へ転じたが、雨森もその時同行して新潟へ行っている。

ここからは、マゼットが明治八年五月に契約が終了し、八月に東京に帰った後の貫一郎の動向を見ることにする。

『福井県医学史』[11]によると、貫一郎は明治八年の七、八月ごろに「医学所の予科理化学教師兼福井伝習所教諭」とあり、マゼットが福井を去った後すぐにこの職に就いたと思われる。そして明治十一年一月の「福井公立医学校並びに公立病院医員教員改列名」の名簿に貫一郎の名前が見られる。しかし、翌年の「医学校並びに公立病院」の名簿にはその名前が見られない。当時、福井県が無くなり、滋賀県や石川県に福井は併合されていたので福井には明治九年秋に福井中学が廃校になって以来中学校がない状態であった。明治十一年、墓参のために福井に来た旧藩主の松平茂昭はこの状態を憂い、金千円と家屋一軒を寄付し、それに旧中学校の準備金や寄付などで新校舎を造り翌年一月福井明新中学校と称したので、貫一郎は医学所からこの中学校の教諭に代わったので、この年の医学校の教員名簿から貫一郎の名前が消えたと思われる。その後、この中学校は福井が石川県から離れて福井県となり、明治十四年には福井県議会の決議を経て、翌年の一月十六日に開校式を挙げて、福井県立福井中学校と称した。なお、貫一郎が明治十四年十二月に福井県立福井中学の教諭をしていた事は確認されている。

（2）福井県立福井中学校時代（一八八一～一八八四）

福井県立福井中学校（以降福井中学校）は上述のように明治十五年（一八八二）一月十六日開校式を行ない、現在の福井県藤島高等学校の前身にあたる。そのため『福井県藤島高等学校百年史』[12]の人物編校長の項に大岩貫一郎に関する記述が「明治十四年十二月本校の教諭となり、物理、化学、動物を教えたが、十六年十二月から十七年六月まで校長心得を務めた」とある。この後に「明治三十年二月本校を去ってからは、岐阜県・埼玉県・香川県・兵庫県の各県で久しく育英に尽力したが、晩年は足羽河畔の別邸で悠々自適して天命を全うした」と記されている。この内容は先に記した『五十周年記念録』と同様の内容である。

そのために同じような過ちが見られる。福井中学校を去ったのは

明治十七年十二月である。これはおそらく校長心得であった貫一郎を一般教諭として留め置くこと出来ないので、岐阜県高山学校の創設にあたり、初代校長として転出させたものと思われる。それにもかかわらず両書ではなぜ「明治三十年二月に本校を去り」となったかということだが、表2から分かるように岐阜県で学校名の変更はあったが校長を明治二十六年十月まで務めて、その後福井に戻り、翌年四月から新しく出来た福井県尋常中学校小浜分校の分校長として明治三十年二月まで務めた。この尋常中学校（福井中学校の名称変更）の分校長の時までの全てを福井中学校に貫一郎が在籍していたと誤認したためと思われる。

本稿では、大岩貫一郎の福井中学校時代は明治十四年（一八八一）十二月から明治十七年（一八八四）十二月までの三年間と考えている。

福井中学校時代の貫一郎については『百年史』の回顧編の中に、第一回卒業の笠原健一が、また『福井中学校創立五十周年記念誌』の第八章歴代校長談片の三代校長大岩貫一郎先生の項に、勝山翁より聞いた話が残記されている。その内容は省略するが、これらの話より貫一郎は自ら学生実験の指導をし、また好奇心に富み、自ら教科書を書き、それについての意見を求め、質問には丁重に答えるなど実直な人物であったので、生徒や教職員の信望を集めていたと思われる。

この時代には『小学博物学』[13]や『小学人体問答』[14]の教科書を書き、また、福井数学協会の発起人[15]など自然科学の普及にも尽くしていた。

（3）岐阜県時代（高山学校、私立斐太学校、私立岐阜県斐太尋常中学校）（一八八四～一八九三）

この時代、学校制度の変更などにより、学校名はいろいろと変わっているが、これらはすべて岐阜県で二番目に歴史のある公立高校である現在の岐阜県立斐太高等学校の前身である。

『高山市史 下巻』[16]の教育編第二章斐太中学校の中で、大岩貫一郎について「福井県の人、明治十七年（一八八四）岐阜県高山学校長として赴任、同十九年私立斐太学校長となり、同二十六年十月迄の一〇ケ年にわたって在任した。その間、師範教育・中等教育従事する一方、有為学会・講習会・通俗講談会を施設して、社会教育に尽くすところが多く、大いに飛騨人を感化した。退職飛騨を去られる事になるや、業績に感謝し、別れを惜しんだ（飛騨人物録）」とある。

上述のように　貫一郎は明治十六年十二月から翌年六月まで福井中学校の校長心得をしており、そのこともあり、高山学校が創立されるに当たり、初代校長に抜擢されたものと思われる。その後、校名の変更にも関わらず明治二十六年十月に退職するまでの一〇年余、校長の職にあり、高山の教育全般に大いに貢献され、高山の人々からも尊敬されていたことが分かる。

また、同じ『高山市史』に卒業生の追憶が記されているが、それによると、貫一郎はグリフィスから聞いたと思われる西洋論理だけでなく、孔孟の教えも同時に学生に聞かせており、福井藩の西洋教育一辺倒にならないようにしていた教育を引き継いでいるように思われる。また化学の授業ではグリフィスの助手をしていた事から実

験の重要性を認識して実践していた事が伺え、学生にも評判の良い先生であった様子が分かる。

岐阜県時代は、貫一郎にとって三〇代から四〇代の初めの時期であり、非常に充実した期間であったように思われる。

(4) 福井県尋常中学校小浜分校（一八九四～一八九七）

福井県尋常中学校小浜分校は嶺南地方に中学校がない状態であったので、明治二十六年（一八九三）県会で小浜分校の設置が認められ、明治二十七年四月より開校となった。この分校は後に小浜尋常中学校、小浜中学校となり、現在は福井県立若狭高等学校になっている。

上述のように貫一郎は明治二十六年十月に私立斐太尋常中学校の校長を退職している。退職の理由は制度の改革で私立中学が県立中学に代わるため切りがよく、高山在住も長くなり、福井に帰省を考えたことによると思われる。

貫一郎が福井に帰っていたので小浜分校の設立時に分校長として適任ということになったと思われる。『若狭高等学校百年史』[17]の第一編小浜中学の歴史によると「当時、福井県尋常中学校の校長は久田監ですが、小浜に常駐することはなく、大岩貫一郎が小浜分校の校長心得（分校長）で首席教諭を兼任し、物理・化学・動物担当で英語も教えた」と記されている。またこの『百年史』には当時の卒業生の話も記されている。それによると貫一郎は厳しい面もあるが生徒にも慕われた実直な分校長（校長心得）であったと思われる。そして一定の評価を受けていたので、次の滋賀県立尋常中学校の校長に抜擢されたものと思われる。

(5) 滋賀県立尋常中学校（一八九七）

滋賀県立尋常中学校は、現在の滋賀県立彦根東高等学校の前身である。貫一郎が滋賀県立尋常中学校に校長として在職したことは『藤島高等学校百年史』などの福井県にある資料には載っていない。その理由は校長の在任期間にあると思われる。『彦根東高等学校百二十年史』[18]年表（一八）の明治三〇年（一八九七）の項を見ると「2月5日大岩貫一郎学校長となる。5月25日川島純幹学校長事務取扱となる（筆者注：貫一郎は休職となる）。7月22日坂田伝蔵学校長となる」とある。しかし、朝日新聞[19]（明治三十年八月十五日）に滋賀県尋常中学校長を退任した事が記されている。上記のように『百二十年史』と朝日新聞の記事に違いが見られる。筆者は叙任辞令（八月十二日、十四日）に基づいて記されている朝日新聞が正しいと考えて、表2では貫一郎の退任は八月とした。いずれにしても貫一郎の実質的な在任期間は二月から五月後半までの三か月と非常に短いものである。

この短い在任期間の理由を上記の『百二十年史』の二二〇頁にある「今井校長と一斉辞任問題」から見ると、貫一郎が校長になる直前の学校の状態は「本校への入学志望者が明治二十八年以降、急増したため、施設・設備が不足し、特に寄宿舎の新築が緊急の課題であった。その教育予算の増額を巡り、学校側と議会側との感情的な対立もあり、議会側は今井校長の「職務不適任」を決議し、今井校長は辞表を提出した。このことを知った教員が次々と辞表を出すという非常事態となった。そして、生徒もこれに同調する事態になっ

た。最終的には教員は全員辞任したが、先生方も生徒に自重するように働きかけたと思われるが学生は残ることになった」というような事であった。

すなわち、貫一郎は教員が全員辞任したようなところに、学校の再建を託されて校長として送りこまれたということになる。しかし、貫一郎の当時のことについては上記の『百二十年史』には一切触れられていない。おそらく、貫一郎は学校再建に一生懸命に取り組んだと思われるが、今まで校長や校長心得を経験しているが、上記のような状況で県議会との折衝や初めての土地での教員集めなどから心労が重なり、心身ともに疲れてしまい、休職に追い込まれたものと思われる。すなわち、貫一郎は再建に失敗したので、この時期のことは『福井県藤島高等学校百年史』に触れられなかったと思われる。

貫一郎はこれ以後、後述のように埼玉県・香川県・兵庫県の中学校へ移るが、校長になることは二度となかった。すなわち、貫一郎は実直であったが、強い指導力で混乱を収める程の政治力は無かったのではないかと思われる。

(6) 埼玉県立第二尋常中学校（一八九七～一九〇〇）

貫一郎は上記のように明治三十年（一八九七）八月に滋賀県立尋常中学校長を退職し、同年の八月には埼玉県立第二尋常中学校教諭として転任している。この第二尋常中学校は現在の埼玉県立熊谷高等学校で同校の『熊谷高校八十周年記念誌』[20]によれば単なる教諭としてではなく、教頭として在任していた。すなわち、校長から教頭に降格していたことが分かる。

しかし、上記の『八十周年記念誌』には在職期間（明治三十・八・三十一～三十三・九・五）は記されているが、当時の貫一郎の動向が分かるような記載はなく、この時代の貫一郎がどのような教員生活をしていたのかわからないが、精神的にも落ち着き、明治三十三年九月まで教頭職をまっとうしたものと思われるが、同じ九月に次の赴任地である香川県に転任しているがその理由については現在のところ分かってはいない。

(7) 香川県立高松中学校（一九〇〇～一九〇四）

この香川県立高松中学校は、現在の香川県立高松高等学校である。同校の『年輪　高松高等学校八十年沿革誌』[21]の「教職員在勤表」の明治三十三～三十七年（一九〇〇～一九〇四）の欄に大岩貫一郎の名前があるだけである。官報[22]によると教諭の肩書のみであるが、給四級上俸月六五円で、埼玉時代の年報が七二〇円であったので、それより高くなっており、降格人事であったと思えない。上記の『八十年沿革誌』にも当時の貫一郎の動向を記すものはなく、そのころの様子はよく分からない。

(8) 兵庫県立小野中学校（一九〇五～一九一七）

この兵庫県立小野中学校は現在の兵庫県立小野高等学校である。同校の『小野高等学校八十周年記念誌』[23]の「職員在籍録」によると、大岩貫一郎の在籍期間は明治三十八年四月～大正六年十月になっているが、朝日新聞によると、貫一郎は明治四十二年（一九〇九）に教諭を退職しているが[24]、引き続き嘱託教授として同校で大正六年

（一九一七）十月まで教鞭をとっていたのでその在職期間は合計で一三年間である。なお、ここでは職務は理化となっている。しかし、どのような講義や実験をしていたかなどの当時の様子が分かるような記述は学校の記念誌にも無く、よくわからない。ただ貫一郎が明治四十二年に退職後も引き続き嘱託教授を要請されて八年間も勤めていることから考えると、その人格や授業は学生たちに好評であり、学校側が、体調をくずして福井へ戻ることを希望するまで引き留めていたと思われる。

その後、大岩貫一郎は福井に戻り、大正八年（一九一九）六月に六九歳で死去した。墓は福井市在田の法満寺にある。

この章の最後に大岩貫一郎の生涯について見てみる。

貫一郎は今見てきたように生涯の大部分を中学校教諭として過ごしており、グリフィスの福井で目指した教育を一番具現した人物のように思える。なぜなら、グリフィスの目指した福井での教育の目的は、日記や書簡などから日本に西洋の自然科学を根づかせるために必要なものは日本中に師範学校を作り、日本人の中学教師を養成してその教師たちが自然科学を日本中に拡げることで、その見本になるような理化学の学校を福井につくることにあったと考えられる。そのため、福井に来てすぐに化学所という理化学の実験室をつくりはじめ、また日本人向けの日本語の教科書を作ることを考えている。すなわち、貫一郎はグリフィスの助手として最も身近で彼の教えを受けて、彼が目的とした理化学の中学教諭として福井・高山（岐阜）・小浜・熊谷（埼玉）・高松（香川）・小野（兵庫）という多くの地域で、西洋の自然科学の考え方や実験の重要性を教えて日本に自然科学を定着させるに貢献したと言える。

また、上述のように貫一郎は若くして校長に任命されたが、滋賀県立尋常中学校長時代に赴任三か月で休職して、その後埼玉県立第二尋常中学校に移るときに教頭に降格しているが、おそらく滋賀県での学校再建の失敗の責任をとらされたものと思われる。その後、香川県・兵庫県では教諭になっている。このように、年齢が高くなって昇進するのではなく、逆に降格している。しかし、おそらく貫一郎自身は最後の小野中学校時代に長い間嘱託教授していたように、栄達を求めるより、生徒たちと一緒に実験などをするなど学校教育に生き甲斐を感じて、生徒などにも好評な教師としてグリフィスの目的に沿った生涯を送ったと考えられる。

四　中野外志男の略歴

中野外志男（一八五四～一八八五）の略歴を記したものは福田源三郎編『越前人物志 中巻』[25]の洋学者の項の中にあるのがおそらく一番まとまったものである。ここではこの略歴に今回見出した幾つかの新しい資料を加味して表3に中野外志男の略歴を記した。

三十二歳という若さで死去しており、早すぎる死去が惜しまれる。

（一）グリフィスの来福以前の外志男

外志男は安政元年（一八八四）に越前福井で福井藩士中野文次郎

表３　中野外志男の略歴

西暦		和暦		年齢	事　　項	出典
1854 年		安政　元年		0	越前福井に藩士中野文次郎の次男として生まれる	文献(25)
1870 年		明治　3 年		16	福井藩中学少年長仰付けらる	同上
1871 年	3 月	明治　4 年	1 月	17	(グリフィス来福する)	
	10 月		9 月		化学所庶務方兼教授手伝いに任ぜられる	子弟輩
1872 年	1 月		12 月		洋学を以て準二等教授に任ぜられる	同上
	1 月		12 月		(グリフィスが東京（南校）へ移るため福井を去る)	
	3 月	明治　5 年	2 月	18	勤務を辞して、東京へ出る	子弟輩
	5 月		4 月		南校に入学（英語　二部）	文献(26)
	10 月		9 月		開拓使御用掛物産掛になる	文献(25)
1873 年	7 月	明治　6 年	6 月	19	アンチセルの鹿児島金山調査に同行する	同上
1874 年	1 月	明治　7 年	1 月	20	モンローの北海道金田調査に通訳兼助手として同行	文献(27)
1875 年	3 月	明治　8 年	3 月	21	開拓使を退職	文献(25)
	3 月		3 月		東京開成学校地質及び金石学助教	同上
	11 月		11 月		同校教授補となる	同上
1876 年		明治　9 年		22	同校教場助手となる	同上
1877 年	2 月	明治 10 年	2 月	23	ナウマンの伊豆大島噴火調査に同行	文献(28)
	4 月		4 月		東京大学理学部教場助手となる	文献(25)
	7 月		7 月		工部四等技　手二級になり、工作局（工部大学校）地質鉱山学助手	同上
1879 年	3 月	明治 12 年	3 月	25	工部二等　、大学博物館掛兼任	同上
1880 年	8 月	明治 13 年	8 月	26	工部三等技手	同上
1881 年	5 月	明治 14 年	5 月	27	教授補	同上
1882 年	9 月	明治 15 年	9 月	28	工部大学校助教授（判任)、従七位に叙せらる	同上
1884 年	12 月	明治 17 年	12 月	30	工部大学奏任助教授	文献(29)
1886 年	2 月	明治 19 年	2 月	32	非職となる	文献(25)
	5 月		5 月		脳卒中で自宅で急逝する	文献(30)

の次男として生まれた。その後、幼少期についてはよく分からないが、『越前人物志』によれば「明治三年二月廿三日福井藩中学少年長仰付られ、学業出精且家庭の勤行につき屡報賞の米金を受く」とある。この前半部分は『子弟輩』にはなく、後半部は『子弟輩』の明治三年（一八七〇）四月十四日の所に同じ内容の記述があり、また十月二日の所には中級へ進み米を年六俵得ることが記されている。すなわち、グリフィスの来福以前は外志男はまだ一六歳で中学校の学生であったが、成績は優秀であったことがうかがわれる。そして、ルシーが明治三年に来福後は彼から英語を習っていたと思われる。

そして、グリフィスの来福に際して大岩貫一郎と共に藩の要望でグリフィスの助手に任命されて、明治四年九月十三日に正式に化学所庶務方兼教授方手伝になり、同年十二月十六日には准二等教授となった。グリフィスの福井滞在中のことは一章に記した。

（二）グリフィスの福井退去後の外志男

グリフィスは一八七二年一月二十二日（明治四年十二月十三日）福井を出て、東京へ向かった。外志男は明治五年二月十三日に准二等教授を依頼退職、二月十八日に東京へ向かっている。すなわち、外志男はグリフィスが福井を去った後、グリフィスを追っかけるように東京に向かっている。このことはグリフィスの東京日記（一八七二年四月九日）に「中野、山形、石田、東京に着く」とあることから、中野は山形と石田の二人学生と一緒に東京に来たことが分かる。

（1）東京到着後から開拓使まで（一八七二）

上記のように外志男は明治五年（一八七二）三月には東京に着いたと思われる。『南校一覧』（壬申四月改）[26]の学生名簿の「英語二部」の所に中野外志男の名前がある。また「英語四部」の所に同行した石田二男雄の名もある。なお、山形は後に医学部に進んでいるのでここには名前はない。しかし、すぐに大学南校化学局手伝い、すなわち、グリフィスの助手になったものと思われる。なぜなら『越前人物志』によれば、明治五年九月二十一日に「大学南校化学局手伝いより開拓使御用掛物産掛となる」とある。外志男は東京に来て六か月の間に南校の学生からグリフィスの助手になり、開拓使に就職するというように目まぐるしく変わっている。

（2）開拓使時代（一八七二～一八七五）

開拓使とは北海道の開拓のために明治政府が作った行政機関で、多くの御雇い外国人を雇っていた。中野外志男は金田すなわち金の鉱山を探す事業で、お雇い外国人の通訳及び補助手の役割をしていた。

上述の様に外志男は明治五年九月に開拓使物産掛になり、明治六年（一八七三）の教師アンチセルの鹿児島県の金山の調査に同行した。その後、明治七年にはライマンの助手のモンローの松前と十勝金田の調査に同行し、その際、金の鉱脈を記す地図の作製に中野が携わり、それがうまく出来ていることをモンローはその報告書「北海道金田地方報文」[27]に記している。このような作図には中野がグリフィスの図画を佐々木権六と一緒に手伝っていたことが役立っていたと思われる。

そして、明治八年三月に開拓使を退職した。この後、中野は東京開成学校や工科大学で地質学や金石学（鉱物学）を教えることになるが、これはこの開拓使時代にいろいろなお雇い外国人教師に直接に現地調査のやり方、鉱物に関する知識を教えられて金石学を専門にするようになったと思われる。

（3）東京開成学校から工科大学まで（一八七五～一八七七）

中野は明治八年（一八七五）三月に開拓使を退職し、同月六日に東京開成学校の地質及び金石学の助教となっている。[28]その後は同年十一月に教授補となり、九年には同校の教場助手、十年四月には東京大学理学部教場助手となっている。これらは当時の学校名や役職の変更によるものである。そして明治十年東京大学理学部の一部が工部省の管轄に移り、工科大学が出来た時に中野は工科大学に移った。

この時期の中野が関係した事で分かったのは、明治十年（一八七七）二月のナウマンの伊豆大島噴火調査に同行していることである。[28]

（4）工科大学時代から死去まで（一八七七～一八八六）

中野は、明治十年（一八七七）七月に工部四等技手二級、工作局（工部大学校）地質鉱山学助手に任命されている。これは明治十年一月に官制の改革により、工部寮が工部大学になり、工作局に属し、そこに彼が東京大学理学部から転任した事を示している。

工部大学では順調に昇進して、明治十四年五月には教授補となり、明治十七年十二月には奏任助教授になっている。[29] しかし、明治十九年に非職になっている。

すなわち、明治十八年十二月に工部省が廃止となり、工部大学は文部省に移管され、翌年三月に帝国大学令が発布されて工部大学は東京大学工芸学部とともに東京帝国大学工科大学となった。この時、中野は正式な大学教育を受けていない、すなわち学士の称号がないために東京大学帝国大学工科大学の教官として採用されず、非職になったと思われる。なぜなら、中野と一緒に明治十七年に奏任助教授になった人たちは、中野を除きすべて工部大学の卒業生であり、教授になっている事が確認されている。

そして非職になったが、次の就職先として石川県の尾小屋鉱山に移るが決まっていたことが『越前人物志』に記されている。しかし明治十九年（一八八六）五月二十一日に送別会の宴の後、帰宅し自宅で脳卒中のために三二歳の若さで死去した。[30] なお、墓は現在も青山墓地にある。

工科大学時代の中野外志男は金石地質及鉱山学教授のミルンのところで助手や助教授をしており、学生実験の指導や「金石学」の講義を行っている。また、工科大学の特徴の一つである大学博物館の専任教官として明治十四～十五年には活躍している。

学会活動としては明治十八年の日本鉱業会の創立に最初からかかわり。創立総会では理事に選出され、役員として活躍している。

ここで簡単に中野外志男の生涯を見ることにする。目につくことは、彼は終始お雇い外国人に実地に教育を受け、正式な学校教育を受けずに大学教官になっていることである。このために東京帝国大学工科大学の設立時には大学教官として採用されず、また実業界への転身を決意した矢先に脳卒中で三二歳の若さで亡くなり、その大成を見ずに終わったことは残念である。彼の死に際して松平春嶽もお言葉を贈られたことが『越前人物志』に記されている。

おわりに

本稿は、グリフィスの明新館時代にその助手をしていた大岩貫一郎と中野外志男の二人のグリフィスとの関わりと、二人の生涯にグリフィスの影響を見ることにある。

大岩はグリフィスの教育理念に沿って中学校の教諭として西洋の自然科学の基本を日本に広めるためにその生涯を中学教諭として過ごし、本人もその生涯についてグリフィスに感謝の気持ちを持って

いたと思われる。

一方、中野はグリフィスに福井で習った英語力と理化学の知識で多くのお雇い外国人の通訳と助手をすることで鉱物学の専門家として工科大学の助教授までなったが、三二歳で亡くなった事は惜しまれる。ただ、中野はおそらくグリフィスの勧めで南校をやめてグリフィスの助手になったと思われるが、南校をやめなければ東京大学の第一回生としてまた別の道を歩んでいたと思われる。中野は人生の岐路で二回もグリフィスの助手を選択している、すなわち、洋行の推薦を辞退して木滑がアメリカに行った時と南校を辞めた時である。ある意味では中野はグリフィスの影響を最も受けた人物と言えるかもしれないが、あまりにも若くして病死したため、その功罪の判断はできない。

謝辞

今回も本稿を書くにあたり、資料の収取や校正などでお世話になりました福井大学図書館の安野辰己氏、原稿の体裁や校閲をしていただいた福井県立図書館の長野栄俊氏、福井藩関係などの史料収集にご協力下さいました福井県立文書館の方々、高山市立図書館、滋賀県立図書館、埼玉県立図書館熊谷分室、香川県立図書館、兵庫県県立図書館のレファレンスにご回答くださいました方々そして北海道立図書館の北方資料係の方々に深謝いたします。

註

（1）沖久也「グリフィスの残したメモ‘Students”（学生名簿）について」（『若越郷土研究』六〇巻二号、二〇一六年）。
（2）山下英一『グリフィスと福井（増補改訂版）』（エクシート、二〇一三年）。
（3）山下英一『グリフィス福井書簡—Griffis Fukui Letter』（能登印刷出版、二〇〇九年）。
（4）福井中学五十周年編纂委員会編『福井県立福井中学五十周年記念誌』（明新会、一九三一年、一二四頁）。
（5）清水町教育委員会編『清水町史』下巻（清水町、一九七一年、一六四一頁）。
（6）貫一郎の生誕地は、父主一の別邸である。三上一夫「幕末初期の足羽川」（『九十九橋ものがたり写真集』（新九十九橋名橋化促進会、一九八六年）は、大岩家と横井小楠の寄留宅との関係について、大岩家の子孫守正氏の談話を次のように引用している。「（小楠は）四畳半・三畳二間の書院づくり風の平家に寄留していたそうで、その後大岩家では、太平洋戦争で福井が戦災にあうまで使っていた」。すなわち大岩家の一部に小楠が住んでいたと思われるのである。なお、貫一郎が亡くなったのも、この別邸と思われる。
（7）ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料　御雇外国人』（小学館、一八七五年、八二六頁）。
（8）敦賀市教育史編さん委員会編『敦賀教育史 通史編上巻』（敦賀市教育委員会、二〇〇二年、四五一頁）。
（9）『文部省年報明治七年　付録（敦賀県）』（福井県文書館複製番号Z四一四八号）。
（10）福井県教育史研究室編『福井県教育百年史 第一巻 通史編（一）』（福井県教育委員会、一九七八年、三三四頁）。
（11）福井県医師会編『福井県医学史』（福井県医師会、一九六八年、二八三頁）。
（12）『福井県藤島高等学校百年史』（福井県藤島高等学校、一九五六年、一三八九頁）。

（13）大岩貫一郎『小学博物学 全三冊』（溝江文明堂・平沢廣済堂、一八八四年）。
（14）真山元著、大岩貫一郎閲『小学人体問答 上・下』（敦賀県文明堂、一八七六年）。
（15）福井新聞（明治十七年三月五日）。
（16）『高山市史 下巻』（高山市、一九五三年、八六～八八頁）。
（17）創立百周年記念事業実行委員会編『若狭高等学校百年史』（福井県立若狭高等学校、二〇〇一年、四六頁）。
（18）彦根東高等学校校史編さん委員会編『彦根東高等学校百二十年史』（創立百二十周年記念事業実行委員会、一九九六年、一一二〇頁）。
（19）朝日新聞（明治三〇年八月十五日）に「依願滋賀県尋常中学校長を免ず　滋賀県尋常中学校長　大岩貫一郎」とある。なお、官報（三十年二月十三日）により、校長の就任は明治三十年二月五日で、また官報（六月二十四日）で五月二十七日に休職を命じられている事も分かった。
（20）熊谷高等学校記念誌編集委員会編『熊谷高校八十周年記念誌』（埼玉県立熊谷高等学校、一九七五年）。
（21）高松高等学校玉翠会編『年輪　高松高等学校八十周年沿革誌』（玉翠会、一九七五年）巻末「教職員在勤表」。
（22）官報（明治三十三年九月二十五日）には「給四級上捧月六十五圓（九月五日香川県）香川県高松中学校教諭　大岩貫一郎」とある。また、官報（明治三十七年五月六日）には「本職を免ず（五月五日内閣）高松中学校教諭　大岩貫一郎」とある。
（23）『小野高等学校八十周年記念誌』（小野高等学校、一九八三年、一一三二頁）。
（24）朝日新聞（明治四十二年八月二十五日）に「願いに依り　本職を免ず」とある。
（25）福田源三郎編『越前人物志（復刻版）』（思文閣、一九七二年、八四七～八四八頁）。
（26）『南校一覧』（弘前図書館蔵）。
（27）（25）では、ライマンに同行となっているが、実際はライマンの助手のモンローの通訳兼助手として同行した。モンローの「北海道金田地方報文」の全文が『新選　北海道史 第六巻史料二』（北海道庁、一九三六年、五〇八～五五五頁）にあり、中野は一八七四年時に同行している。この時住民の伝承話も収集した。
（28）山下昇「ナウマンの火山及び火山岩研究」（『地質雑誌』第九六巻、一九一〇年、四七九頁）。
（29）『工部省沿革報告』は『明治前期財政経済史料集成　一七巻の一（復刻）』（明治文献資料刊行会、一九六四年）があり、その工部大学校三五〇頁にある。
（30）（25）にあるが「中野外志男君逝」（『日本鉱業会誌』第一五号、一八八六年、一〇五六頁）。